

一心寺かわら版

第三十三号 平成二十七年一月発行

ホームページ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索を

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中は護持運営にご協力いただき誠に有難うございました。また、五月には前住職の葬儀、十一月には「よるしるべ」と大勢の方にお集まりいただき、みなさまとのつながり、温かさを強く感じた年でもありました。

「前住さんがいなくなつて寂しいでしょう」と声を掛けていただきます。確かに、もうあの大きな声を聞くことはできないのですが、不思議といなくなつてしまったという気がしません。お念仏して「俱会一处（ともに一つのところ、お浄土で会う）」、

お浄土は「去此不遠（ここから遠く離れているのではない）」といいただき、いつも仏さまと一緒に感じられるのは有難いことです。本年がみなさまにとつて素晴らしい年となりますことを念じつつ、新年のご挨拶とさせていただきます。 南無阿弥陀仏

「あいてを鬼とみる人は自分もまた鬼である」

本年の柱掛け法語は真宗僧侶・曾我量深氏のことば、厳しいお諭です。私たちは相手を「鬼」と見る、悪いのは全て向う側とするのが常です。自らのことを正しく省みることはなかなかできず、私は…だから悪くない、と何かしら理由をつけて善の側に立とうとします。そのように判断しているのはいつも煩惱を持った私です。

二月の節分になると「鬼は外、福は内」と言つて豆を撒きます。幸福を願い、災いを厭うのは人として当然です。しかし、自分にとつて不都合で嫌悪するものや人を「鬼」とし、好都合なことや人を「福」と考えるならば、際限なく「鬼」は増え続けていきます。自分にとつて不都合な相手を「鬼」と見る時、私はその人を「人」と見なしていないのでしょうか。ですから退治しても良いこととしてしまします。そう思つた瞬間に心の中で、恐ろしい形相でその相手を八つ裂きにしてしまつていいるのではないのでしょうか。それはまさに「鬼」の姿に違いありません。

仏典に常不軽（じょうふきよう）菩薩のお話があります。増上慢（おごり高ぶる）の者が大勢いた時代に、常不軽という菩薩が現れます。なぜこの菩薩がそう呼ばれていたかというところ、それは彼がしていた行によるものでした。彼は出会う人ごとに合掌礼拝し、こう言います。「あなたを尊敬いたします。決して軽んずることはありません。あなたは菩薩の行をして、仏になられる方だからです」。言われた者の中には怒り出す者もいて、棒で打ちつけ、石を投げつける者までいました。しかしこの菩薩はそれでも「あなたは仏になられます」と言つて合掌礼拝し続けました。そして人々に教えを説いて回られ、ついには覺りを開かれました。

相手を「鬼」と見るのではなく「仏」と見て拜んでいくことで自らも「仏」となつていく。それは「鬼」に縛られ苦しんでいた自らが解き放たれて、「福」となつていくこととでしょう。浄土真宗は「南無阿弥陀仏」と拜んで、大きな慈悲のはたらきに目覚めていく教えです。自らの内にある「鬼」を見つめつつ、「仏」を拜んでいきましよう。



よるしるべ&よるしらべ報告

観音寺の夜の街を彩る「よるしるべ」をご存知でしょうか。昨年は「瀬戸内国際芸術祭」、今年は十一月に「アート瀬戸内二〇一四」のプログラムとして開催されました。当山がその舞台となりましたので、展示された作品、開催されたイベントを紹介します。

●灯り（榎黄州氏）…山門にぴったりの趣のある作品が皆さまをお出迎えしました。（←）



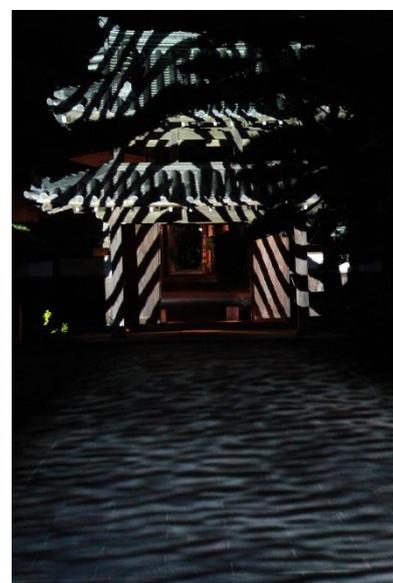
●音（永田壮一郎氏）…お寺にある仏具が出す音で構成された作品は不思議な感覚。映像やパフォーマンスにも面白さを加えました。

●香り（おもち・梶高果代氏）…お寺の香とは異なる甘美な香りが心地よく体を包みまします。香りに誘われ山門より左に折れて路地を行くとそこには輝く「やどり木」が…夢の世界に迷い込んだようでした。（↓）

●映像「波紋・有明浜」（おもち・梶高慎輔氏）…観音寺有明浜の映像等で作られた作品。



暗いお寺の境内にミスマッチかと思いきや、それがより一層幻想的な雰囲気醸し出しました。本堂に上がって見ると波が立体的に浮かび上がります。山門には様々な文様が投影されました。（←）



●パフォーマンス「てのり湯」（トムスマ・オルタナティブ氏）…茶道を独自にアレンジしたおもてなしパフォーマンス。頭には地球、ダンス、所作、笑い、静寂が織りなす不思議な世界観。地球という普遍的な存在を捉え、仏教にも通じる安らかな精神世界へと導く新たな茶道でした。（↓）

★声明・雅楽コンサート「よるしらべ」。二〇〇人以上の来場で座席が足りないという嬉しい悲鳴、来場者の方にはご不便をお掛けしました。

和蠟燭の炎に照らし出された輝く荘厳の中、なかなか耳にする機会がない本格的な声明と、笙（しょう）・箏（こと）・琵琶（びわ）、龍笛（りゅうてき）、箏（こと）・琵琶（びわ）、鞆



鼓(かっこ)・太鼓(たいこ)・鉦鼓(しょうこ)という管・絃・打楽器が奏でた雅楽の音色。「炎に照らし出された荘厳が美しかった」、「全身で声明を浴びた」、「京都での体験よりも素晴らしかった」、「来年も是非開催を」などの声を頂戴し大変嬉しく思っております。来年も「よるしるべ」と共に「よるしらべ」も開催できればと思っておりますので、またのご来場をお待ちしております。(←)



真宗教団連合香川県支部間法大会報告

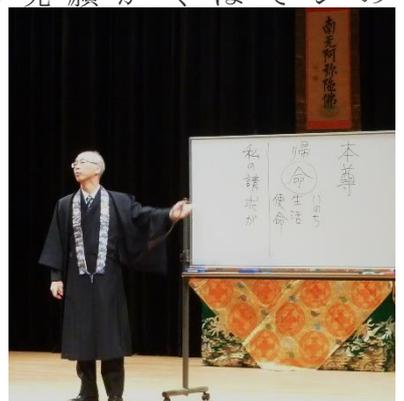
十月九日、三木町文化交流プラザにて開催された間法大会。真城義麿氏(大谷派善照寺住職、元大谷中学・高等学校校長・右下写真)が「親鸞聖人は何を求められたのか」と題して講演されました。

あなたは何を求めているのか。あるアンケートでは幸福の条件は①健康②お金③家族。しかし、それを満たしても寿命は尽きていく。お孫さんから「元気になってどうするの?何を求めるの?」と聞かれたら何と答えるのか。手段と目的を勘違いしているのではなにか。人間は「私の請求が、私の都合よく、充足される」ことを願

っている。だいたい私の請求は外からの情報によって誘導されたもの。コマシヤルを見たり、隣の人が持っていたりで欲しくなる。それは私の本当の請求とは違うのではないか。また、私の都合よくということではなく他人にとって都合が悪いこと。孫が合格しますように、と願うことは他の誰かが落ちてくれという呪いと表裏一体。また、充足は有り得ない。一億円欲しいと言っている人が手に入れて満足したというのは聞いたことがない、もっともっと欲しくなる。つまり、「私の請求が私の都合よく充足される」ことを求めているのは迷いである。

杉山英一氏の詩『生』に「物を取りに行つて、何を取りに来たのか忘れることがある。途中で思い出せば幸せである。身体が先に生まれてきて、何をしに生まれてきたか分からないまま死んでしまふ。途中でそれが分かった人は幸せである」とある。何のために生まれ、生きているのかを教えてくれる人に出会うことは幸せであろう。

本尊とは「本当に尊いもの」。何を尊んでいくのか。正信偈は「帰命無量寿如来」とはじまる。帰命の「命」とは①いのち②生活③使命という意味があるが、いのちの帰るところ、私がこの世に出てきた使命とは何かを明らかにしなければならない。無量の「量」とは、数値化、単位のこと。何か得るのに相応の対価を払うという等価交換の世界。数値は増減するし、対価を払えば「これだけしたのに、これだけ払ったのに」という思いが起る。数値で量られて、できたら認められる世界では、できないものの居場所がない。競争させられ、できなければ自己責任と非難されるストレスだらけの社会。



年を取ってできないことが増えてくれば自分の存在意義がなくなる。校長を退職するときに、先輩に「ボケないためにはキョウイク（教育？）とキョウヨウ（教養？）が大事」と言われた。はて？と思ったが、「今日行く（キョウイク）ところ、今日用（キョウヨウ）があること」が大事だと教えられ、なるほどと思った。年を取っても行く場所がある、役割があるということが大切である。

できたら認められるから「頑張ります」という世界から、できないことが増えて「お願いします」。何もできなくなつて「お任せします」。最後にはただただ「有難う」となるべきなのだが、なかなかそうはならない。自分が人よりできることを誇り、お任せしてもあれがまずいと文句を言い、感謝のところまではたどり着かない。

親鸞聖人は比叡山で二十年間修業されたが、量の世界、できたら認められる世界で苦惱され、どうやってもできないところまで行き着かれた。そして法然上人に出会って、本願、無量の世界に感動し、帰依された。本願の世界とは、あらゆるいのちが何の条件もなく尊いと認められていく世界、条件次第で変わる量というものを問わない世界。何の条件もなくという、悪いことをしてもよいのかという人がいるが、本当に本願に目覚めると、この大切ないのちをそのように使おうなどとは思わない。

念仏したらどうなるのか、と聞かれることがある。海に潜つてみるとどのようなものですか、と聞かれてもきちんと説明することはできない。潜つてみてくださいとしか言いようがない。それと同じで念仏も称えてくださいとしか言いようがない。親鸞聖人が『歎異抄』で、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との法然上人の仰せにまかせのみ、と述べられたのと同じである。その中で見えてくる世界がある。

親子の関係には目的がある。「ああなつてほしい、こうして欲しい」という欲（条件）がある。祖父母は孫に「ここにいてくれればいい」（無条件）という思いだけである。祖父母が仏さまにお参りするときに、そばに孫がいれば素直に手が合わさる。年をとつても役割があるというのはいかにもこういふことであろう。

浄土真宗の本尊は「南無阿弥陀仏」、それを漢訳したものが「帰命無量寿如来」。本当に求めていくべきもの（いのちの帰するところ）が分かった人は、それを伝えていく使命があるのである。

と聞かせていただきました。

昨今、お念仏の声があまり聞こえないと言われます。それは仏教、浄土真宗のみ教えが私たちにとつて必要なのではなく、私たちが求めていくものが間違っているのではないか、きちんと親鸞聖人と出会えていないのではないか、と考えさせられたことです。

秋季永代経報告

九月二十七日、秋季永代経勤修。法話は川田慈恵師（高松市・妙楽寺）。仏教、浄土真宗は四苦八苦からの救いを説く。それは、しあわせになる教えではなく、しあわせかどうか気にならなくなる教えである、と聞かせていただきました。前住職が往生してはじめての寺院法要。お勤めの声が一つ足りない寂しさを感じながらも、俱会一処、お念仏のみ教えの有難さを感じたことです。

